

## 第5回環境思想部会報告論文2

## エコロジズムとジェンダーとの関係性

## 「本質主義」と「自然主義」との異同にふれて

吉田 哲郎 Yoshida, Tetsuro

## 0. はじめに

エコロジズムは自然と人間との関係性を問い直そうとする思想であるといえるが、一見ジェンダーとは無関係であるように思われる。しかし、生命や生活を支える再生産活動に関わる女性はより自然に近い存在として捉えられ、自然観の形成にジェンダーの視点はすでに含意されているものと考えられる。とりわけ西洋近代の自然観は性差別の基礎をなす家父長制によって強化されていると見たとき、エコロジズムはフェミニズムと共鳴し、そこに誕生したのがエコ・フェミニズムである。しかしながら、エコ・フェミニズムにおいては、ジェンダーをどのように捉えるかが常に問われてきた。すなわち、女性性を本質的なものとみなすか、あるいは構築的なものとみなすかという根本的な問題をはらんでいると思われる。

フェミニズムの文脈での「本質主義」とは、性差あるいは女性性を社会や文化に先立つものとして、人間（女性）の「本性＝自然」を指していると思われる。ここでは、エコ・フェミニズムの潮流と二つの立場を概観した上で、その「本質主義（批判）」の延長線上において、ジェンダーと身体との関わりについてふれる。そのことを踏まえて、フェミニズムにおける「本質主義」とエコロジズムにおける「自然主義」との異同についての“素朴な”問題提起としたい。

## 1. エコ・フェミニズムにおける二つの立場

エコロジズムと同様にフェミニズムにもまたさまざまな潮流がある。エコ・フェミニズムは、その両者の観点が交差する地点に生み出されたゆえに、その展開にもさまざまな立場があると考えられる。一般的に、多くのフェミニストは自然と人

間との関係に関心を示しているが、自然と女性との関係について相異なる了解があり、その反映としてエコ・フェミニズムには大きく分けて二つの立場が存在する。

一つはラディカル・フェミニズムやカルチュラル・フェミニズムと呼ばれる流れを源流とする立場である。これは「自然、人間の霊的、精神的な部分を重視するスピリチュアリズムと女性文化を究極的目標」とする流れを受け継ぐものであり、一般的にカルチュラル・エコ・フェミニズムと呼ばれている。オルタナティブな「女性文化」すなわち「女性と自然との歴史的、生物学的、経験的な結びつきを強調して、論理を組み立てる」ことが基本的な戦略となる。

その一方で、社会主義思想やソーシャル・エコロジーの影響を受けて成立したのが、一般的にソーシャル・エコ・フェミニズムと呼ばれる立場である。戦略的には資本主義・市場主義の変革・解体を目的とするが、その基本的な主張は「資本主義的家父長制社会のヒエラルキーを打倒することによって、女性の解放と自然の解放」を実現することである。

## 2. 「本質主義」批判

エコ・フェミニズムの潮流を展望するとき、ソーシャル・エコ・フェミニズムからはカルチュラル・エコ・フェミニズムに対して批判が向けられているとするのが基本的な捉え方であると思われる。すなわち、カルチュラル・エコ・フェミニズムがスピリチュアルなものを重視するがゆえに、それは神秘的・宗教的なものに収斂し、逆に現実的な実践には結びつかず、社会的な視野を欠いていると考えられることと、「女性と自然を無媒介に

結びつける」ことにより「女性間に存在する、階級、文化、人種的差異を無視している」とされたことである。端的に表現すれば、カルチュラル・エコ・フェミニズムは「本質主義」に陥っているといえるであろうと思われる。

この「本質主義」とは、二元論への回帰や陥穽を意味していると思われるが、エコ・フェミニストたちはエコ・フェミニズムの「本質主義」からの回避に腐心しているように思われる。たとえば、メアリー・メラーは、フェミニズムとエコロジーの洞察に関して、この議論に不必要な二元論が忍び込んだため、私たちは本質論と社会的構成論との間で誤った選択を迫られることになったと述べ、この袋小路から抜け出すには、自然的なものも社会的なものも否定せず、人間社会をエコロジー的に制約され、かつ物理的に制約されたものとして唯物論的に分析することで、両者を弁証法的に超越するしかないとしている。このことから、エコ・フェミニズム（とりわけ、ソーシャル・エコ・フェミニズムの立場）の根本的な理念は二元論を超克する弁証法的な立場にあると考えられ、エコ・フェミニズムそのものが「本質主義」であるとする批判を回避しているといえるであろう。

### 3. ジェンダーと身体

女性性について論じるとき、その身体との関わりは避けて通ることはできないと思われる。身体とジェンダーとの関わりを論じるとき、ジェンダーをどのように捉えるかは基本的な問題である。仮に、「構築主義的な説明」が妥当であったとしても、現実に存在する性差の存在を無視することは不可能であろうと思われる。その一方で、「本質主義的な説明」（科学的な説明）の正当性はどのように担保されるのであろうか。

加藤秀一は、ジェンダーも生物学的基盤の上に成り立っていることを示唆していると思われるが、生物学的決定論と文化・環境決定論のどちらか一方がすべてであるとする考え方は誤りであると強調している。このように性差に関する二分法は曖昧であるとして、セックス/ジェンダーの再定義を

提案する。すなわち「セックス」は「有性生殖に密接に関連づけられる行動・形質」であり身体の基本的な形態が属する。一方「ジェンダー」は「セックスの作用を受けながらも自律的に存立し、逆にセックスを作り変える文化的基盤」をさし社会的性別役割、女性の地位、文化圏ごとに異なる慣習などが属する。性自認や性的指向、性格および行動パターンへの傾向性といった個人レベルの心理現象は両者のグラデーション状の中間領域のどこかに位置付けられるとしている。

さらに加藤は、以上の概念化を補足するかたちで、性別が生物学的にオスとメスの二つしかないという事実の「認知」と、人間の性別は二つしかない、すなわち男と女しかないという規範性や、それに基づく制度の構築の「正当性」は次元の異なるであると述べ、その証拠としてトランスジェンダーなどの人々の存在と、その人々の生き難さを挙げている。また、科学は、ある特定の属性に注目する立場であるという意味において本質主義であるとし、人間を対象とする生物学も本質的に差別的でしかありえないのだろうかと問い返している。

### 4. 二つの本質主義

また、加藤は、フェミニズムの文脈に沿って二つの本質主義について述べている。フェミニズムの文脈での「本質主義」とは、性差あるいは女性性を社会や文化に先立つ人間（女性）の「本性＝自然」として想定する思考を指している。ここで、反本質主義者は、性差は存在してもかまわないが、それは人間社会にとって所与たる「本性＝自然」ではないと主張する（ジェンダー概念の開発）。しかし、フェミニストが性差の存在そのものを否定しようとするのは、すでに性差別と性別役割規範によって貫かれた社会空間において、事実認識として性差を認めることが規範命題としての男女の役割を認めることと同値に解釈され、性差別を再生産してしまうからである。しかし、性差に生物学的な基盤があるか否かは重要ではないという。たとえば爪の形が遺伝的に決まっていたとしても、

爪の形を焦点とする反本質主義的な展開はふつう考えられない。それは爪の形に与えられる社会的な意味がきわめて小さいからであり、人の本質—以下であらためて述べるが、偶有性に対立する本質的特性という意味での—として扱われていないからである。それに対して、性差の概念と結びついた性別は、重大な社会的な差別と結びつく機能を有している。

そのことを踏まえると、「本質（主義）」をめぐる問題群は、大きく分けて二つの軸から構成されていることが見えてくる。第一は「ある属性が、認識主観の活動に先立って対象それ自身に帰属しているか、それとも認識主観が対象に属性（にみえるもの）を付与するののかという対立軸」（性差の生物学的基盤を認める考え方は前者）であり、第二は「対象の様々な属性のなかに、『そのものをそのものたらしめる』という特権的な価値を与えられたもの（本質的属性）とそうでないもの（偶有的属性）とがあるという対立軸」である。性差が人間の本質的属性であり、女性性が女性の本質的属性であるならば、当の属性が何に由来するものであれ、人間に性差という本質を認めるという意味で本質主義と呼ばれる。

現実の本質主義的な言説は、つねにこの二重性を内包している。だが、第一の軸で議論されるとき、より根源的な第二の軸での問題はしばしば不可視の前提とされ、懐疑の対象からは除外されてしまうのである。爪の形ではなく性差が社会的差別に利用されるとしたならば、そのような差別の正当化を可能にする言説のメカニズムこそが問題とされるべきであり、これは第二の軸上での本質主義の問題であるといえる。

## 5. 再び、ジェンダーと身体

身体は物質からできていることは一般に自明視されている。身体というものが存在するのならば、それは外部の世界に存在する物質であり、身体が物質でないとするならば、それはそもそも存在しないといえるのだろうか。この問いかけに対して加藤は、まず身体そのものがあって、その諸性質

があるのではなく、さまざまな性質の総和、諸活動の把握しがたく動き続ける連鎖だけが現実の物質的なものとしての身体なのである、と答えている。それゆえに、それに先立つ「身体そのもの」とは抽象概念でしかなく、身体に固定的な本質を認めることは「身体そのもの」という概念とその物質的存在とをとりちがえる第一歩である。すなわち、性別も人種も身体の本質ではなく、それは多様態としての物質的身体から、ある価値判断のもとに抽出され凝固された特質にすぎない。上述のように、そのような特質が生物学的な基盤を持っているか否かは二次的な問題にすぎない。

さらに加藤は、これは倫理的な呼びかけであるよりも、むしろそのように考えなければ、この社会に性差別や人種差別が厳然と存在するということの説明がつかないという。「もしも性別、性差、性役割が、真に人間を分け隔てる本質として自然なる身体そのもののうちに書き込まれてあるならば、どうしてこれほどの社会制度や暴力とが、その維持と拡大のために動員されなければならないのだろうか。」この問いかけは真摯に受け止めなければならない。われわれは構築主義であれ、本質主義であれ、それを批判することは何らかの価値判断からなされるよりも、そのように主張される立場にどのような意味があるかについて、まず問わなければならないと思われる。

## 6. 「本質主義」と「自然主義」

そもそも本質主義は構築主義の対立概念であり、構築主義の立場からは批判的な文脈で使われることが多いと思われる。一般的に構築主義は、現実には社会によって構築されたものであるとし、その意味で実在する身体もまた社会によって構築されたものであると解釈されるように思われる。その一方で自然主義は、人間は自然の一部であると主張し、人間の身体は自然と切り離すことができない。この意味において、自然主義は一元論と解釈することが可能なのではないだろうか。そうであるならば、二元論を克服しようとする立場から見る限り、構築主義を立てる必要性はないように思

われる。

結局のところ、構築主義（反本質主義）が、主体に帰属する本質の存在を否定するならば、その依拠するところは何らかの価値判断に基づくものになるように思われる。エコ・フェミニズムにおける「本質主義」が批判されたのは、女性性に関する特定の価値判断に由来しているとも考えられる。その方向で「本質主義」の展開を捉えるならば、「本質主義」は「自然主義」との異同よりもむしろ、自然の固有の価値や内在的価値の問題へと収斂していくように思われる。

#### 主な参考文献：

- 加藤秀一「ジェンダーと進化生物学」、江原由美子・山崎敬一 編『ジェンダーと社会理論』有斐閣、2006年、所収
- 加藤秀一「構築主義と身体の臨界」、上野千鶴子 編『構築主義とは何か』勁草書房、2001年、所収